

「総合的な学習の時間」と「総合演習」の動向

- パート2 . 「総合演習」ノート -

坂 井 旭

The Movements of “ The Course of the Presentation (Show and Tell) ”
and “ The Skill of the Presentation ”

- Part 2 . Note of “ The Skill of the Presentation ” -

Akira Sakai

はじめに

1998（平成10）年に公布された「教職員免許法一部改正の法律」により、「教職に関する科目」として新設された一つに「総合演習」がある。各教員養成校では、平成11年度または平成12年度から開講が始まっている。これに連動して、2002（平成14）年から保育士養成施設においても保育士養成課程の改正に伴い、新たに「総合演習」が課せられた。

「総合演習」は、教育職員免許施行規則の中では、「総合演習は、人類に共通する課題又は我が国社会全体にかかわる課題のうち一以上のものに関する分析及び検討並びにその課題について幼児、児童又は生徒を指導するための方法及び技術を含むものとする」と記されている。

一方、保育士養成課程の「教科目の教授内容」における「総合演習」では目標として、「1 . 保育に関する自発的、科目横断的な学習能力を習得させる。 2 . 保育に関する現代的課題について、問題等の現状分析・検討を行わせる。 3 . 問題解決のための対応、判断方法について検討させる。」と示し、内容としては、「『総合演習』は、保育にかかわる課題の中から一以上のものに関する分析・検討を行うと共に、その課題について、児童や保護者を援助するための技術・方法について学修させるものとする。さらに、問題を発見し、その問題を解決する過程を理解し、解決内容について再検討する手法を習得させることを目的とする」と掲げている。

このように「総合演習」の捉え方は、教員養成と保育士養成とは細部においては異とするが、社会に対する課題の取り組みを解決しようとする学生への主体的な行動の資質を高める科目として設けられていることに違いはない。

「総合演習」の新しい登場は、小・中・高等学校の学習指導要領改訂に伴って実施された、「総合的な学習の時間」に対する教員の指導力向上のためと受けとれる。「総合演習」においては、「総合的な学習の時間」が試行学習の積み重ねの教育効果による全面実施に結びついたの

とは隔たりがある。つまり、「総合演習」は、開設指定が先に在りきと言えなくもない。しかし、教員養成校の中には、それまでも学生の主体的行動や人間性教育の向上を育成する独自の科目を開設し、教育力を培ってきたことも少なくないのではないかと思う。

「総合演習」を取り上げたのは、「総合演習」をどのように養成校で実施していくのがよりよいことなのか、どのように教育成果を上げていくのか、という教育方策検討の糧にしたかったことにある。「総合演習」誕生の仕方にも一因はあるが、試行事例発表は「総合的な学習の時間」に比べ甚々少ない。今後、様々な教育研究の場で、「総合演習」の成果事例や内容の方向性がより明確化してくるのではなかろうか。

本稿では、拙者が目にした「総合演習」に取り組んだ事例や教育姿勢を提示する。今回は、「ノート」として各方面の動向を集約したに過ぎないが、しかし、「総合演習」に関わる者にとって他大学の事例等は、参考になるのではないかと考える。

「総合演習」の捉え方と事例

大学・短期大学の報告から

文部省（当時）から2年間の研究プロジェクト経費の助成を受け、「教育課程における教育内容・方法の開発研究事業」として「総合演習」に取り組み、報告書として記している大学の報告から、2大学1短期大学を提示する。

兵庫教育大学学校教育研究センター報告の中で、成田滋が、「総合演習」の教育的意義、特徴を端的に示しているので取り上げる。

成田は、報告書の「はじめに⁽¹⁾」の中で、小・中・高等学校での「総合的な学習の時間」の特徴を4つにまとめている。

1. 学校の創意工夫 2. 指導の内容や名称は「ねらい」にそって決められる 3. 学習の形態は学校や学級の独自の考えで工夫できる 4. 「ねらい」は一応は規定されている

これを受けて成田は、「総合演習」は「総合的な学習の時間」を担当する教員の資質と力量を高めるという視点を念頭に置いて構想するとわかりやすいとしながら、「総合演習」の4つの特徴を述べる。

1. 大学の創意と工夫によって指導内容が決められる 2. 演習の形態は大学の独自の考えで工夫できる 3. 「ねらい」の解釈は自由である 4. 指導の内容や名称は「ねらい」にそって決められる

成田はこの3.において、演習活動をするに当っては、「人類全体に共通する課題又は我が国社会全体に関わる課題」と「児童又は生徒を指導するための方法と技術」に添うことが定められ、学習指導要領の柱である「生きる力」の内容は当然含まれるものであると指摘している。

成田は、「総合演習」に対する教員の臨む方略を8つ提起する。

1. 学生にチャレンジする 学生自身が知的な好奇心をおこすためには、教員は学生に挑戦

的に臨まねばならない。

2. メタ学習の方略を学ばせる 「ものの考え方や学び方を学ばせる」が求められている知識そのものとはいったいなのかという根元的な問いを考えさせる契機となるのがグループワークのねらいである。
3. 時事問題に強くさせる 「人類全体に共通する課題又は我が国社会全体に関わる課題」を取り上げるには、毎日の世界の動きに敏感でなければならない。信頼できる情報を持つものが相手を説得することができる。
4. 情報技術（IT）を活用する 新しい学校の創造やそこでの生徒の学習は、情報技術の活用によって大きく変わりうる。
5. グループワークで作業させる 「総合演習」の「ねらい」は、学生が互いに協力して学問の分析や解決方法を導ける能力を養うことである。
6. 学生はプロデューサーであることを認識させる。
7. 互いに批判しあうことを躊躇しない。
8. 学習の成果を重視する 「総合演習」で学ぶ事柄は多岐にわたる。例えば、学ぶ事柄の決定、文献考察、資料検索の技術、調査方法の技術、統計処理の基本的な技術、面接の技術、相手を説得する話術、分かりやすく話す技術、反論する技術、プレゼンテーションの技術などいろいろある。こうしたスキルアップは、自分のアイディアを売り込む強力な手段となる。

「総合演習」を担当する教員に対して、成田は、これまでの注入主義的な指導から180度視点を変えさせる指導スキルを提示した。このスキルは、まず学生をしっかり受け留めることから始まり、メタ学習（高次の学習）を学生自身に体得させる手だてとしては理解しやすいし、教師にとってその手だての方策は、さらに自己の指導におけるメタ学習への具体策として活用しやすいといえよう。「総合演習」実践でのグループワークで生じる教育効果やプレゼンテーションに至るまでの学習展開においては、担当学生の実態を踏まえた上で、成田のいう「学生にチャレンジする」姿勢が根底に望まれよう。その実践経緯から、教員と学生との信頼関係だけでなく、学生自身の前向きな行動力を体得いたらしめていくことになるといえよう。

山形大学教育学部での「総合演習」の方策では、鈴木隆が次のように記している⁽²⁾。

「理解を深化する能力」や「実践的指導力」の育成を教育目標とするためには、“課題解決能力（大学審議会答申での“課題探究力”）と継続的な“自己教育力”の育成が必要であるとしている。“課題探究能力”つまり「主体的変化に対応し、自ら将来の課題を探究し、その課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下すことのできる力」の育成を図るためには、教育主体型の学部教育の方法・内容を、特定の授業では大胆に教員から学生へ主客を転換し、教員は支援に徹し、学生に「試行錯誤」の重要性を体験・認識させるような“新しい教育システム”を構築しなければ成立しないと、そのような授業形態の先導的授業科目として

「総合演習」を位置づける。

「総合演習」の教育内容としては、「知識の抽象的な分析から具体的な総合把握へ」を目標に、 1. 「学生主体・体験重視授業」 2. 「授業・教育実習一体型授業」 3. 「全教員指導・支援型授業」 を中心とする“新しい教育システム”を導入している。この1. 2. 3. を、鈴木はさらに次のように示す。

1. 「学生主体・体験重視型授業」

“課題探究能力”と“自己教育力”の育成を図ることの授業として、

- (1) 学生を十分に試行錯誤させることのできる授業
- (2) 課題をより深化して追究・理解させるため、同課題について複数回は、プレゼンテーションの機会を持たせる授業

授業内容は、「今日的課題の認識」「課題発見」「課題探究と深化」「課題のまとめ」「プレゼンテーション」「評価」「課題の再探究と再深化」「課題の再まとめ」「再プレゼンテーション」「再評価」のように、随所に「試行錯誤」を繰り返して「課題の深化とまとめ」ができるように十分、時間を保障する授業とし、そのために学生に自由に活動できる「フリータイム」制度を導入する。

2. 「授業・教育実習一体型授業」

「総合演習」では、「総合的な学習の時間」で要求されている指導そのものであり、「総合演習」では「総合的な学習の時間」を視野に入れた実践的な指導力の育成を図る授業を、単に、今日的課題の認識、発見、探究、深化、理解に終わらず、その過程を「総合的な学習の時間」の授業として計画するための指導案作成や模擬授業等を含めた授業。

従来の教育実習のように、学部教育の集大成の場として、教育実習を教育実習として分離せず、大学の授業の一部として教育実習を位置づけ、自ら聴講している授業のねらいとそのねらいを育成するためにはどのような指導が必要かを考えさせる場を設定し、知識・理論と実践的指導力を機能的に結びつけるようにする。

3. 「全教員指導・支援型授業」

当学部では、「総合演習」の担当教員として、全教員が関わり責任を持って運営する新しい指導体制を導入した。さらに、責任の所在を明確にするために、探究したまとめの「プレゼンテーション」は、学会形式とし、学生と指導・支援教員の連名で発表する。この指導・支援システムは次のような波及効果がある。学生の探究には、実地調査等が含まれるので、学生の指導・支援を通して、教員は地域社会と積極的に関わりを持たねばならなくなり、教育学部の地域社会との、より一層の連携につながる。

鈴木が記した山形大学教育学部のこの方針は、1. 学生自身に主体的に行動を促すために試行錯誤を十分行わせ、プレゼンテーションを重視すること 2. 小・中学校での「総合的な学習の時間」の捉え方や計画立案など、従来「教育実習」で行っていたことを「総合演習」という授業で、小・中学校教員と共に行い、また、小・中学校での実際の教育実習における「総合

的な学習の時間」の観察・体験学習を、「総合演習」の授業の一部として位置づけたこと。つまり、「総合演習」と「教育実習」とを一体化を試みること。そして、何より3.として、全教員が、学生支援側にまわること を打ち出し、実践しているのである。

兵庫教育大学、山形大学教育学部の報告は、教育に関する深い知識と理論をもつ教員が、知識と理論を学生に注入するという講義制の従来の教育方法から、学生を教壇側に立たせ、指導力をつけさせるべき授業展開の指導体制、指導方法を示した、大学教員への指導マニュアルともいえよう。そこには、大学教員の授業への取り組みの改革を迫っているといえるのではなからうか。

「総合演習」についての一層のノウハウでわかりやすい指針を示してくれるのが、久留米信愛女学院短期大学の報告⁽³⁾である。短期大学という余裕のない短い限られた年数で、いかに高率よく学生に実行力を高めていけるのか、その取り組みの姿は、多義に渡り明解ともいえる。他の短期大学においては興味深いと思われる。その方策を示す。

久留米信愛女学院短期大学での「総合演習」の取り組み

久留米信愛女学院短期大学（以後、久留米信愛と称する）では、1.学生の成長を支援する科目としての「総合演習」 2.短期大学の特性に応じた「総合演習」 と捉えて、「総合演習」の開発研究に取り組んでいる。

久留米信愛では、1.学生の成長を支援する科目としての「総合演習」は、1998（平成10）年6月に答申された中央教育審議会「幼児期からの心の在り方について」における 1.「生きる力」を身につけ、新しい時代を切り拓く積極的な心を育てること 2.正義感・倫理感や思いやりの心など豊かな人間性をはぐくむこと 3.社会全体のモラルの低下を問い直すこと 4.今なすべきことを一つ一つ実行していくこと を受けて、次のような視点を持つ。

1. 現実に目の前に起っていない現象を想像し、分析・検討する能力が身につく内容・方法であること 地球的規模で変動する21世紀を生きる子どもたちの「生きる力」を育てるためには、発展途上国における食料危機問題や地球的規模の環境問題など、学生（特に短大生）にとって身近に感じられないような課題を、国際人・地球人として次の世代を指導できる能力を培う必要があること。
2. 身近な現実の課題に積極的に関わろうとする態度が育つ内容であること 学生が各自の生活の中で工夫・実行でき、子どもと共に考え指導可能なゴミ分別、ゴミを出さない工夫、リサイクルの方法や、学生を社会に向けさせるボランティア活動の課題・方法・機会の提供など。
3. 自己を相対比でき、複数の視点から物事を観る能力が培われる内容・方法であること 40名の子どもを担当をすれば40名の異なる見方・考え方・感じ方を理解せねばならな

い。

4. 人生や社会の豊かさ・複雑さ・楽しさが実感できる内容・方法であること 学校現場とは、様々な境遇の子どもたちが集う学習集団であり生活集団である。いじめ・暴力・非行・怠学などの背景には、貧困・家庭不和・虐待・教育無関心などの複雑な要因がある。その中で一人一人がよりよく生きる努力をし、かけがえのない存在であることを学生に理解させ、社会や人生を肯定的に捉える態度を培う必要がある。
5. 「生活力」の形成につながる内容・方法であること 学生が自らの生活を見直す機会となり、健康で安定した生活を営む力と、より豊かな生活を築く姿勢を形成することにつながるよう工夫する。「生活に対する積極的な態度」、即ち「生活に対する愛」を持ち、子どもに生活文化を伝え育むことのできる教員の養成である。

短期大学の特性に応じた「総合演習」としては、4年制大学生に比べ年齢も低く社会経験も浅い短大生に対してそれを配慮する必要があると述べ、それらを次のように示す。

1. 年齢・経験不足を補う内容・方法であること。
2. 学生の直接体験を重視する内容であること。
3. 養成教育のガイダンス的役割を果たす内容・方法であること 短期大学の場合、2年次は学外実習や卒業研究・就職活動などによって時間的余裕がないため「総合演習」は、1年次に開講が予測できる。従って、倫理的思考を行う訓練やコミュニケーション能力の形成、レポート作成や意見の発表技術など、資料収集・調査・分析・報告・発表・討論など、即ち、読む・書く・聞く・話すなどの大学教育における基本的形式能力の育成もこの科目の役割となる。

さらに、久留米信愛では「総合演習」の教育方法としての留意点として3つ掲げている。

1. 「総合演習」を短期大学における教員養成の基礎教育と位置づけること。
2. 「総合演習」によって実践的能力を形成すること。
3. 「総合演習」を大学授業改革の実験の場とすること。

以上に記したそれぞれの中身は、大学教育の在り方としても重さを持つ。久留米信愛が投げかけた「総合演習」に対する意気込みは、4年制大学と対比して、学生に対する短期大学教育の在り方を示しているといえよう。

久留米信愛は、短期大学の学生を見据えながら、短期大学の教員養成校としての過密なカリキュラムの中で「総合演習」で求める教育内容は何か、また何を体得させていくのか、大学あげて取り組み、深めている。そして、久留米信愛の大学授業の一端にしようとする姿勢が強く伝わってくるのである。

大学教員の「総合演習」研究から

西南学院大学の生野金三は、小・中・高等学校での「総合的な学習の時間」に対する「横断的・総合的な指導」の在り方に視点を置いて述べている⁽⁴⁾。生野は、「児童（生徒）と横断

的・総合的な指導」との関係は、「生きる力」に集約されているという。「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」とは、「生きる力」の知識を得たり体得したりする学習ではなく、自ら思索をめぐらし、判断して解を求めるという「主体的な学習」、あるいは「学び方の学習」であること。

さらに、生野は、「学び方の学習」を通して課題（問題）の解決や探求活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにすることを説く児島邦宏の見解を差し示しながら、次のように断言する。

『『総合的な学習の時間』における学習内容は各教科、道徳、特別活動を含む総合的なものであり、個々の児童が問題解決に必要とする限りの内容が、教科内容の配列の順序性に関わりなく含まれるものである。畢竟、『総合的な学習の時間』においては、現実の生活の中で生きる力を付けることがねらいである（傍点筆者）。』

この捉え方を基盤にして、生野は、「総合演習の在り様」として、信州大学教育学部の「総合演習」実施事例の様相を説明している。信州大学の在り様を掲げ、生野の見解を示そう。

1. 対象

- ・実施は2年次前期、基本的に定員（15名程度）による制限以外には受講制限を行わない。受講生は自分の関心のあるテーマの演習を自由に選択することができる。他専攻・他分野の教員や学生と交流できるようにした。

2. 実施方法

- ・原則的に教員全員のエントリーではあるが、専攻（講座）に責任を持って調整してもらうこととした。「学校教育臨床演習」や他の授業の負担を考慮し、専攻（講座）が担当を決定することとした。
- ・毎年36人参加し、18クラス開講する。2名で前半・後半を受け持つものでも、2人で1つの演習を共同開講するものでもよいとした。テーマは教員の自由とした。

3. 授業の方法

答申では、「ディスカッション等を中心に演習形式」の授業を基本とし、「現実の社会状況を適切に理解」できるよう「実施の見学・参加調査等を取り入れる」などの工夫をなしている。また指導方法を身につけるための「指導案や教材」の作成や「模擬授業」などの実施を期待するとしている。そこで、信州大学教育学部ではおおよそ次のような基準を設けた。

- ・演習の形式で、学生主体的な参加を重視し、一方的な講義にならないように注意してもらう。自分で調べ、プレゼンテーションを行う能力、他と協力して調べたり、討論することから学ばせようとした。
- ・教員がテーマを与えても、受講生の研究指導のような形態にしてもよいこととした。
- ・専門分野に引きつける場合、内容だけでなく、方法や技法を扱ってもよい。しかし、新学問があつて、それを教え込むという方法ではなく、問題や関心が先にあつてそれを主体的に調べ、新しい問題や関心を掘り起こすと同時に、多様な方法を自然と身につけるとい

ことに留意してもらふことにした（傍点筆者）。

- ・シラバスでその内容、あるいは方法が受講生によく分かるようにする必要があったとした。いろいろな分野の受講生が相互交流できるようなかたちが望ましいからである。
- ・前半7時間は、毎週の授業で、後半は合宿や集中形式など、多様な授業形態を工夫してもよいとした。
- ・指導法まで演習の内容に含まれるものが望ましいが、信州大学教育学部では「学校教育臨床演習」という授業もあるので、担当教員に対して、そこまで要求はしない。
- ・演習の人数の上限は15～20名とした。

4. 評価

- ・演習担当の教員に一任する。評価は人類的課題という答が定まらないテーマを扱う以上、客観的テストより平常点やレポートによる評価が望ましいとした。
- ・「総合演習」は新しい授業である。したがって、これまでにノウハウの蓄積がない。そこで年3回、カリキュラム委員・教務委員・総合演習の担当者から構成される委員会を持ち、授業のあり方・実施方法・問題点の検討・演習の反省などを行うことにした。

この信州大学教育学部の「総合演習」の在り方に対して、生野は、「対象」での「受講生は自分の関心あるテーマの演習を自由に選択することができる」ことに対して、「総合的な学習の時間」のねらいを念頭に置く必要があるとし、「(総合的な学習の時間は)知識の獲得だけを重視するのではなく、自ら考え、判断していく『自ら学ぶ学習』あるいは問題を解決する『学び方の学習』を目指している。欺様な学び方や問題解決力を育成するに当っては、まずもって指導者である教員がこのような資質能力を有していることである。教員としての資質能力の形成はむしろ本人の志向や性格によるところが大きい。しかし、大学の教育過程では、動機付けや体験の機会を設定しながら課題解決能力や自己教育力の育成に重点を置いた授業内容・方法の工夫をしていく必要がある」と指摘する。「実施方法」では、「テーマは自由にした」ことに対して、「テーマ設定では教育職員養成審議会の指摘する『人類共通するテーマ』『我が国の社会全体に関わるテーマ』等を踏まえるべきであろう」と言及している。しかし、生野は、信州大学教育学部のこの実施様相が、「『総合演習』を構想する際、多くの示唆を与えてくれよう」とも述べている。

結びの中で、生野は、「『総合演習』が学則上、明確に演習として位置付けられたことにより、ある課題の下で少人数による参観・調査・発表(模擬授業)・討論を行いながら問題を解決する場が制度的に保障されることになる。この教育効果は大きいと思われる」と、「総合演習」の登場とその指導方法の意義を唱えている。

生野が取り上げた信州大学教育学部の「総合演習」の取り扱いもまた、教員への施策といえ、従来の指導方法との折衷案的要素も強い。生野が言う、学生や教員の意向や自由裁量にまかせ過ぎではないか。「総合演習」は、小・中・高等学校での「総合的な学習の時間」の指導内容

に対応しうる教員養成としての資質を学生に体得させることであり、その資質育成とは何かを大学教員が問い、そして実践しなければならないのではないかと考える。生野の言う、学生に対して、「自ら考え、判断していく『自ら学ぶ学習』、問題を解決する『学び方の学習』」を目指さねばならないであろう。学生や教員が容易な自由裁量の形式にするのではなく、授業のテーマ、内容について、基本的な統一見解を示すことも必要であるといえよう。

生野は、大学教員においても「総合演習」で何を育むのか、そのためにどのようなテーマを掲げるのか、その指導内容はどのようにするのか、各々の大学教員の専門の枠を越えて、「横断的・総合的な学習」を目標に据えて、教員間での事前の議論が必要であると言いたいのではなからうか。信州大学教育学部では、その後においても、年3回の検討委員会が持たれ、授業の在り方、実施方法・問題点の検討・演習の反省が検討されるという。前向きが期待される。

日本福祉大学社会福祉学部（以後日福大と称する）の藤田紀昭は、日福大で「総合演習」の実践例を『大学と教育⁽⁵⁾』の中で提示している。藤田は、2000（平成12）年度、「総合演習」を担当すると同時に、総合演習運営委員会（「総合演習」の内容を充実させ円滑な授業運営をサポートするために、教務委員会のもとに組織された）のまとめ役の経験を持つ。日福大では1年次に開講し、導入教育としての位置づけを持つとしている。藤田が掲げた「総合演習」のシラバス抜粋を以下に記す。

総合演習 シラバス

1. 講義の目的

総合演習は1年生を対象とした演習（ゼミナール）形式の授業です。演習は教員が主となり授業を進めていく講義形式の授業とは異なり、学生と教員がともに主役となり主体的に学習を進めていく授業です。1. 自ら学習を進めていく習慣、姿勢を身につけること。教員が講義することをノートに書きとめ、覚えるといった受動的な学習ではなく、自ら学習テーマを設定し、学習を進めるという主体的学習態度を形成することです。2. 自ら学習を進めていくためのスキルを習得すること。ここでいうスキルとは、必要な文献の集め方、それに関連する図書館の使いこなし方、レポートの書き方、学習発表や意見表明（プレゼンテーション）のし方、討論の進め方などです。この授業では年間3回のレポート提出が課されています。担当教員は適宜、レポートを添削して返してくれることになっています。3. 学問することの面白さを知り、幅広い教養を身につけること。こうした学習を通じて、いわゆる「テストの勉強」ではなく、自らテーマを設定し、学び、「物事の真実」に近づいていくこと、つまり学問していくことの面白さを知ることです。

2. 開講方法

週一度、授業が開講され、これが学習の核となります。一クラスは25名程度で個人あるいはグループ学習（サブゼミ）を進めていきます。サブのための時間（サブゼミ・アワー）が設定

されています。

3. 春季セミナーについて

社会学部で学ぶ意義を確かめること。宿泊を伴う共同体験の中で教員と学生、また、学生同士の理解を深めていくことを目的として「春季セミナー」を実施しています。

藤田によれば、「総合演習」では、教員と学生、学生同士それぞれの相互作用を前提として、学生が主体的に学ぶこと、学習を進めていくためのノウハウを習得すること、学ぶ面白さを目的としており、この目的は日福大が掲げる大学教育の「学ぶ力」「働く力」「生きる力」の育成課題に対する導入教育として位置づけている、ということである。

次に、藤田自身が、2000年度に実践した授業の学習内容の一覧を示す。

表 2000年度総合演習 の実践例

日程	回数	授業の内容
4. 12	1	自己紹介、オリエンテーション、班分け、係など サブゼミ 春季セミナー準備等
4. 19	2	学習の進め方などについて サブゼミ 春季セミナー準備等
4. 26	3	学習の内容について サブゼミ 春季セミナー準備等
5. 10	4	図書館ツアー サブゼミ 春季セミナー準備等
5. 17	5	春季セミナー準備 サブゼミ 春季セミナー準備等
5. 24	6	春季セミナー
5. 31	7	サブゼミ
6. 7	8	発表：うめ 家族・障害者
6. 14	9	発表：さとし 家族・虐待、家庭内暴力
6. 21	10	発表：まつ 家族・思春期の親子の関わり合い
6. 28	11	発表：さくら 家族・絆、兄弟
7. 5	12	発表：ちゅうりっぷ 家族・離婚、結婚、母子家庭
9. 24	13	朝から討論会(10時00分～16時00分)
9. 27		朝から討論の代休
10. 4	14	新しい班分け、係りの決定
10. 11	15	学習方法の決定 学習テーマの決定
10. 18	16	学習の柱立ての検討、発表順番の決定
10. 25	17	集合の後サブゼミ
11. 1	18	中間発表 5班、1班、3班
11. 8	19	中間発表 4班、2班
11. 15	20	サブゼミ
11. 22	21	5班発表と討論 仕事の現状について
11. 29	22	1班発表と討論 食品の問題性 レポート報告集編集委員会の立ち上げ
12. 6	23	3班発表と討論 死-自殺について-
12. 13	24	4班発表と討論 食生活について
12. 20	25	2班発表と討論 アルコールについて
1. 10	26	まとめと自己評価 レポート報告集の作成配布
5月12日		第1回コンパ クエスチョン
5月23日24日		春季セミナー
6月		第2回春ゼミ打ち上げコンパ・持ち寄り(奥田北公会堂)
6月7日		第1回レポート締め切り「4年後の自分-私の過去・現在・未来」→添削後コメントつけて返却
7月18日		第3回前期打ち上げコンパ・持ち寄り(奥田北公会堂)
9月24日		朝から討論
9月26日		第4回朝から討論打ち上げコンパ・持ち寄り(奥田北公会堂)
9月24日		第2回レポート締め切り「無敵のハンディキャップを読んで」→添削後コメントつけて返却
10月4日		第3回レポート締め切り「前期学習のまとめ」各班ごとに提出
12月20日		第4回レポート締め切り「後期学習のまとめ」各個人で提出→添削後コメントつけて返却
1月27日		第5回1年打ち上げコンパ

- ・うめ、さとし、まつ、さくら、ちゅうりっぷは前期の各グループの名前。
- ・前期は統一テーマを「家族」とし、各班が関心のある視点から学習を進めた。
- ・後期は統一テーマは決めず、各班ごとに独自のテーマに取り組んだ。
- ・前後期ともこうした学習方法は学生達が話し合って決定した。

藤田は、一泊の「春季セミナー」を次のように記す。

「キャンプファイヤーや卒業生との語り、クラスでのレクリエーションが主たる内容であった。電動車いす利用の女子学生ももちろん参加した。彼女をどうサポートするかを考えることで学生たちは期せずして障害者の介護体験が可能になった。…学生達はサブゼミアワー（毎週総合演習が行われる次の時間帯）や放課後の時間を利用してキャンプファイヤー等での出し物を考え、準備し、練習を行った。その過程とセミナーを通して仲間づくり、クラスづくりを行えた点を学生たちは評価していた」

当初の春季セミナーは、教員と学生間の信頼関係を築き上げている。その信頼関係が、授業の発展に深く連動していることは当然である。

「総合演習」の内容は、前期では「家族」の共通テーマをもとに、「障害者、虐待、家庭内暴力、思春期の親子の関わり合い、絆、兄弟、離婚、母子家庭」がグループごとに検討され、発表している。後期には、藤田は、学生たち自身にテーマ選びをまかせている。学生たちが発表したテーマ「仕事の現状について、食品の問題性、死 自殺について、食生活について、アルコールについて」は、学生たちの関心事がわかり、学生たちの寄せる思いが検討や発表の中で発揮されたのではないかと察する。

藤田は、ここでは内容の展開について触れず、授業の流れや導入教育としての実践を記している。つまり、シラバスでの目的2・自ら学習を進めていくためのスキルを学習することに、藤田が取り組んだ実践の様子が示されている。レポートの書き方へのスキル対応である。シラバスでは、年3回のレポート提出を学生に義務づけし、そのレポートの添削を教員に求め、返却を謳っている。藤田は自らのその関わりを示している。藤田は添削を大学の行き帰りの電車の中で行い、レポート提出の翌週には添削したものを返却できたと。この労の結果で得たものを藤田は次のように言う。「回を重ねるごとに学生の文章は目に見えて良くなり、読みやすくなった。丁寧な指導によって学生は伸びるということを実感した」と。そして藤田は、成長する学生を求めて次のように言う。「学生の学力低下が指摘されるようになって久しい。…様々なレベルの学生を入学させている以上、学生の学力低下を嘆きつつ、旧態然とした授業を繰り返しているのでは教育者としての責務を果たしているとは言えない」と言い、特定の学生にはさらに、特別メニューのレポート課題を与え、そのすべてのレポートに添削を加え、その成長ぶりをみとどけている。そして、藤田は、「筆者自身、学生達の成長に驚かされると同時に、学生たちの可能性と、時間をかけて学生達を指導することの重要性を認識できた」と記している。そして、さらにこう記す。「総合演習の授業運営のノウハウの蓄積と共有、教員間にある様々な差異の解消（例えば、レポートの書き方やレジュメの作成方法など）総合演習の目的を大学教育の中で明確にし、その充実を図ることを目的として、『総合演習 手引』を作成した」と。まさに、総合演習は日福大の導入教育としての位置づけが発揮しているといえよう。

藤田の授業に参加した学生の言葉と、藤田のこの授業に対する言葉から授業の在り方が伝わってくる。

学生のことば 「このゼミに入って一番良かったと思えることは友達がたくさんできて、みんなと仲良くなったことです。また、高校などでは自分の意見を発表する機会がほとんどなかったのので、このゼミで自分の考え方を説明したりすることは最初は本当に難しかったです。でも相手にわかるような説明のし方、レポートの書き方は就職してからも絶対に役立つと思うので忘れずにいようと思います」

藤田のことば 「学生達を感じた勉強の面白さはあくまでも主体的に勉強することの面白さであり、学問の面白さではない。その意味では、『遊び』の面白さと変わりが無い。この点は筆者の力不足と勉強不足である。こうしてみればシラバスに書かれた総合演習の3つの目標のうち前者は及第点、最後の1つは落第点ということになり、学生の下した69点という評価はかなりの的を得た評価といえよう」

「総合演習」のシラバスから、日福大の教育の姿勢が伝わってくる。そこには、授業そのものに、学生と教員がしっかりと対面していることが読みとれる。例えば、藤田が語った年間3回のレポート添削指導がある。この行為は、藤田の実践をみても、担当者に相当な努力を要する。春季セミナーもしかりである。そこには、教員が、多様な学生に対して、一人一人に正面から臨み、教員と学生間のコミュニケーションから生じる教育効果を導入教育として重視していることのあらわれといえる。藤田の実践から、学生一人一人が高まるためには、まず教員の学生に対する意気込みと、学生との触れ合いへの努力は切り離せないことが読みとれるのである。

私立短大での「総合演習の内容と方法」(私立短大保育科関係教職員研修会から)

教員養成校では、平成10年3月までに再課程認定の文部省(当時)承認を得て、平成11年度から「総合演習」を開講したのが最初である。当時、養成校では、平成12年度開講を目指す大学が多く、「総合演習」の在り方を模索していた時期でもあった。

折しも、私立短大保育科関係教職員研修会が平成11年9月16、17日の両日に開催され、17日には、第4分科会で「総合演習の内容と方法」の研修が午前、午後とも積まれている。参加者は72名(63校)の多きを数えた。その分科会での発表の一部を紹介する。

宝仙学園短期大学 渡辺啓治の報告⁽⁶⁾から

「国際理解教育」として位置づけ 2年次後期 2単位 担当：保育科専任教員・特別講師
1. 授業のねらい

先進国としての日本が他国をどの様に理解して共存していくべきか、人類の永遠のテーマである「世界平和」について、我々が保育を通してやれる事は何かと考える。現在、多国籍の子どもが多数保育園、幼稚園に在園している。時代のニーズに応えた重要な研修と考える。

2. 授業の内容と方法

遠くて、近い国といわれる「韓国」を取り上げて考える。日本と歴史的関係、異文化、戦争の悲劇と責任について理解する。韓国の子ども達とのふれあい等、韓国を理解することを手がかりに、世界における日本の役割を考える。

3. 授業計画

前半、講義 ・国際理解とは何か 世界における日本の役割 日本がやらなければならないこと ・日本と韓国との歴史的関係の経緯 ・異文化と生活/言葉 ・韓国語講座 ・世界の幼児教育/福祉の問題 ・平和と戦争(世界大戦が残したものについて考える)
・他国訪問の準備と認識

後半、韓国訪問の実際 ・韓国文化に触れる、考える(景福館・民族村等の見学) ・学生交流(大田実業専門大学の訪問) ・韓国の子ども達(韓国幼稚園実習の実施) ・戦争、平和について考える(板門店見学、パネルディスカッションの開催) ・世界の福祉を考える(HOLT福祉施設訪問)

4. 平成10年度国際理解教育(韓国保育研修スケジュール)

12月8日 出発 ソウル到着

12月9日 幼稚園実習 サラン幼稚園、ソニイル幼稚園、テークアン幼稚園、チュアン幼稚園の4園に分かれ、各園1クラス6~7名 実習には通訳なし 各園にて質疑応答 特別講義及びグループ討議

12月10日 又松情報大学幼児教育学科との交流会 相互の混じった8グループ交流(1グループ4人+4人)
・宝仙の学生は各自、日本を紹介できる小さなプレゼントを用意

12月11日 平和、戦争を考える 板門店見学 講演、グループ討議

12月12日 国際理解について考える まとめ 伝統芸術鑑賞

12月13日 帰国

5. 参加学生の感想の一部

(1)「嬉しい」と「もどかしい」

研修旅行の一番の思い出、それは幼稚園実習である。何か一つおもちゃを、ということで私は折紙を選んだ。ただ折るだけでは誰でも考えられるので、紙テープで子どもが作った物を授業で習った「チャムザルヘッソヨ(よくできました)」を言いながら首飾りにしようと思ったのだ。そして前日、一緒に作るために必要な言葉を覚えて、当日にそなえた。実習当日、おもちゃは大成功に終わることができた。ところが、問題はその後の出来事であった。給食後、「気持ち悪い」と寄ってきた子どもに対し、私は寒いのだと勘違いし、抱きしめて背中をさすると、少し吐いてしまった。あそびの中で手をふまれ、泣いている子どもに対し、言葉を掛けられずたださすることしかできなかった。言葉が通じない中で、これだけ親しくなれたことを嬉しく思う反面、言葉が通じない故に、何もしてあげること

のできないもどかしさを感じた。言葉なしに持てる信頼と、言葉がなくては持てない信頼があるのだと、あらためて教えられた実習であった。

(2) 「板門店から感じた事」

板門店を案内して下さったガイドさんはもうすぐ息子を徴兵に出さなければいけない事を涙を浮かべて話した。心にズシッときた。戦争は悲しい。一人一人の心が皆悲しさで一杯になる。そして戦争が終った今でもその悲しさは続いている、ということに気付いた。大切な人を兵隊に行かせる気持ちは想像もつかない位悲しいのだろう。朝鮮民族が心から幸せになれるのは38度線がこの世から消える時なのではないかと思う。どうして同じ人間が憎しみ合い、対立し合わなければならないのだろう。誰もが本当に平和を願っているはずなのに。私は実習や交流会で、言葉は通じないが笑顔や身振り手振りで心を通わす事が出来た。文化も言葉も違う私分かり合えたのに同じ民族が分かり合えないはずがない。いつか必ず統一される事を信じ祈る。そして悲しみに暮れる人がいなくなり世界中が平和に幸せになれるために私はこれから保育者として平和を作る人間を育てていこうと思った。

宝仙学園短大のこの実践は、単なる国際理解だけでなく、人類の平和とは何か、生命の尊さとは何か、をも考える機会となり、他国訪問を通して、それらを深く学びとっている事例といえよう。養成校の中には、海外で幼稚園実習を体験させ、世界の幼児教育に触れさせて、広い視野での保育の在り方を学ばせているところは複数校ある。しかし、宝仙学園短大のように、冷戦状況の緊迫感までも体験させて、平和や生命の尊さを学ばせようとする大学は数少ないといえよう。学生一人一人に深く響き実る実践研修にするため、宝仙学園の保育学科専任教員全員が何らかの形で参加し、5泊6日の中で韓国の保育者養成校との交流、幼稚園実習での体験、さらに、南北朝鮮の歴史的緊張状況の体験と、そこで得られる教育的意義の大きさに驚かされる。2つの学生の体験文から深く読みとれる。(1)からは、幼児とのかかわりで言葉の重要性を学んだ姿は、改めて、幼稚園実習の存在が高まったであろうし、(2)の板門店見学体験は、隣国、韓国の深くて厳しい姿を学び、人間教育の在り方を問い質そうとする姿勢が生じている。多くの参加学生の声は、授業のねらい、「人類の永遠のテーマである『世界平和』について我々が保育を通してやれることは何かを考える」を学びとっていよう。宝仙学園短大の教員たちの願いが、現実にしかりと実っている実践と言えるのである。この研修は回を重ね、いっそう教育効果を上げている。そしてこの実践「国際理解教育」は、新設「総合演習」と解け込んで余りあるといえよう。

山梨学院短期大学 小林栄子の報告⁽⁷⁾から

「総合演習」 1年次前・後期 テーマ：地球の視野に立って人々がどのようなライフスタイルをとればよいのかについて考える 教員4名が担当 4分野を設定 1.アジアの歴史 2.現代の課題 3.現代の国際関係と日本 4.生物と環境

山梨学院短期大学では、「総合演習」を1年次前後期に設けた理由として、学生に早く教師像を位置づけたいためであると唱える。このテーマから、子どもたちに地球規模での問題をどう伝えるかの指導は難しい、と小林は発している。ここでは、小林が提示した資料の「生物と環境演習2単位 担当：赤井住郎」を示そう。初めに概要の抜粋をする。「"素晴らしい地球に生を受け、そこで生活する私たちが、生態系の生物の一種であるヒトとしていかに生きていかねばならないか"。これは、まさに今、私たちが考えなければならない最重要課題である。本授業では、生物学的観点から、遺伝子から地球規模までの環境問題について学び、ホモ・サピエンスとしての私たち人間が、どのようなライフスタイルをとればよいのかを考える」

前半では、1.生物とは何かの理解 2.生命の連続性の理解 3.生態系の理解 を学習目標に掲げている。授業内容と学習課題・自主学習課題においては、前半では、第2回「生命誕生(ビデオ併用)」、「生命誕生のメカニズムのまとめ」、第5回「循環系(ビデオ併用)・呼吸、血液、心臓、リンパ」、「レポート課題『ヒトはなぜ呼吸するのか』」、第11回「エイズ・エイズ社会」、「討議課題・エイズと社会について」、第13回には、「エコシステム・生態・食物連鎖」を示している。

後半(後期)では、第17回「大気異変が起きている(ビデオ併用) オゾン層破壊・地球温暖化」、フロンガス規制まとめ、第21回「食と環境、食品と化学物質との関係・安全な食生活を求めて、討議課題「安全な食生活について」、第23回「ゴミについて考える、どうゴミを減らすか・リサイクル社会に向けて」 討議課題「環境を考えたライフスタイル」が掲げられている。

赤井のこの「生物と環境」の各回の指導内容は、1つ1つ深いテーマといえる。そして、学生へのレポートまとめ課題や討論内容を深めれば深めるほど、テーマ1つ1つが1コマ全体を通す内容にも匹敵するほどのテーマ内容へ発揮し得るものである。

赤井がまず「生命」を取り上げているのは興味深い。地球上での生命について考えさせ、個体としての生命のしくみを科学的に捉え、人体を築き上げている臓器の高等なしくみを示し、個体としての生命体の重要さを知らしめている。そして、生命を脅かすエイズとその社会性にまで踏み込む課題は、深い人間性をも考えさせるテーマ選びといえよう。

後半は、自分と環境との関わりを見つめさせる。身近なゴミ問題から、大テーマの地球環境のオゾン層破壊問題やエネルギー問題を取り上げるなど、今日的な世界共通課題へと発展し、「環境を考えたライフスタイル」へと導く。

現今の我々一人一人の人間が、地球環境にどう取り組むか、将来の子どもたち、否、生物全体の存続が豊かに成り得ていくかを、学生たちは課題研究しているのがわかる。しかし、ここで学んだ地球環境の問題を、どのように子どもたちに知らしめていくかは、ここでは見えてこない。

小林はこうつけ加えている。

「本演習(『生物と環境』だけでなく、他3つの演習を含めて)を通して互に協力する態度を学ぶと共に、他者の意見を大切に人間関係をも深めたい。それらを研修するのみならず、

『幼児教育にどのように生かしていくか』その方法などについても具体的に検討し、展開し、発表したい」

この小林のねらいは、教育職員免許法施行規則での「総合演習」の中にも、「幼児、児童又は生徒を指導するための方法及び技術を含むものとする」と明記されている。この点にも一歩踏み込んで、学生たちに検討・理解させていく必要があるのである。

フロアーからの発言の一つとして、頌栄短期大学では、「人間の尊厳性」をテーマに掲げたと言う。専任教員全員が同一テーマを行い、「コルチャック先生」「ホタル」「黒い雨」等の書籍を題材にして“平和について”考え、テーマ「人間の尊厳」を、教師と学生間で深めているという。これもまた、人間性の深く、重いテーマに対ち向かっているのである。

ここで紹介した事例は、保育者養成校として、近い将来、幼い子らへの人間教育、人格形成教育にも携わろうとする学生たちにとって、「平和とは何か」「人間教育とは何か」「生命を育む環境とは何か」そして「一人一人が、それに向って何ができるのか」に、正面から各々の立ち向かう姿が読みとれるのではあるまいか。

この私立短大保育科関係教職員研修会・第4分科会では、当日、集計された「アンケート結果」の報告もされている。その資料をもとに、小川哲男が、総合演習の授業形態、評価の方法・内容等について整理している。その資料を資料1として後尾に掲げておく。

・総合演習と「^{いのち}生命の教育」

「総合演習」は、先に掲げたが、「人類に共通する課題又は我が国社会全体に関わる課題のうち一以上のものに関する分析及び検討並びにその課題について幼児、児童又は生徒を指導するための方法及び技術を含むものとする」と教育職員免許法施行規則第6条に定められている。

2001年の「人類に共通する課題又は我が国社会全体に関わる課題」としては、2001年9月11日に起きた米国同時多発テロ事件、それに続くアフガニスタン軍事報復は、子どもたちにも連日連夜、テレビ映像として目に飛び込んでいた。日本に限れば、この事件、報復に先だつ6月8日、教育現場という大阪教育大学教育学部附属池田小学校で、侵入者による23名の児童、教職員が殺傷される事件が、衝撃的に日本社会を揺るがした。我々教育者にとって、生命の尊厳を改めて教育の場で問い質す必要にせまられたといえよう。

『現代教育科学 548号』では、『生命の教育』いま何を問題とすべきかの特集が組まれている。村井淳志は、「生と死のリアルな現場から隔離された子どもたち」の中で、次のように記す。

「生命の教育がなぜ問われているのか？それは子どもたちの中に、生命の誕生と終焉について知りたいという要求がここ20年、急激に膨らんできたからだ」と。そして、「かつて（の子

どもたち)は出征、結核、老衰などによって『自分はもうすぐ死ぬ』と自覚した人たちが、子どもたちの周囲にもたくさんいた。死は子どもたちにごく身近だったのだ。…『いのちとは何か、人生にはどんな意味があるのか』を切実に考えざるを得なかったことだろう⁽⁸⁾」

長尾彰夫は次のようにいう。

「人間の『いのち』が大切にされなければならないのは、それがかけがえのない、そして限りあるものだからだろう。…人間はいつかは死ぬ、人間の『いのち』は限りあるものである、ということが一方に据えられていくことによって、その大切さが見えてくるのではないか。こう考えると『いのち』の教育は、同時に『死』の教育ともなるのであり、いわゆる『デス・エデュケーション』(Death Education)の課題ということになる⁽⁹⁾」。

「『生きる力』なるものは、zest for living = 生きることへの意欲、というように英訳されるらしいが、さすれば『生きる力』を目指しての教育改革といったことも、『いのち』の教育につながっていくと言えなくもない」。「デス・エデュケーションは、総合学習の注目すべき重要なテーマであろう。しかし、総合学習のテーマ云々を越えて、『いのち』の問題は、人間の教育にとって根源的な課題なのである」と。

この特集では、さらに小・中学校教員による授業実践内容が盛り込まれている。4区分19事例の姿である。その4区分とは、1.「生命の教育」の大切さ アメリカテロ事件で学ぶ 2.「生命」をめぐる異文化理解 宗教と教育の関連を考える 3.「生と死」改めて生命の授業を問う 4.「戦争」をどう考えるか 授業化への課題 である。小・中学校の児童・生徒の生の姿が展開されている。「生命の教育」の中で何を授業で取り上げるかは大きな課題であろうし、問題でもであろう。しかし、教育現場では、現実の生と死について子どもたちから切り離せない事実もあると考えられるのである。

得丸定子は、2000年4月、「新潟大・上越教育大 いのちの教育を考える会」を立ち上げている。得丸によると、この会のスタッフは、教育大学、教育学部の教員と学生から成り、いじめ、自殺、学級崩壊、児童虐待、子どもの健康など、子どもと若い世代の親の「いのち」の捉え方が気になり、教育に携わる者として何かできることがあるのではないかと考え、生涯教育の一環として「生と死」を含む「いのち教育」に取り組む目的で結団をしたというのである。

2000年度には、「いのちの講座」シリーズとして8回の講座を開催、20～30歳代男女を対象とした。

「子どもに最も影響を与えるのは親です。ゆえに次世代の子どものことを考えるのならば、今の若い世代の親の意識に焦点をあてることが有効と考え、環境問題、食生活、出産、子育てのテーマについて、第一線で活躍している大学の先生方による月1回の開放講座を開きました⁽¹⁰⁾」と語っている。

得丸は、先に掲げた「デス・エデュケーション」についても次のように言及している。

「本講座で扱いたい『いのち教育』の内容はたくさんあります。例を挙げると、日本人特有

の死生観、郷土の慣習・行事といのち教育の関連について、子どものさまざまな悲しみと、そこからの立ち直り方、自殺と自殺予防教育、子どもと心の傷（トラウマ）などが残されている問題です。諸外国の受け売りの『Death Education』ではない日本的な『いのち教育』とは何かを探るためには、日本人の死生観を知る必要があります」と、日本の現状に柱を据えて、述べている。

『いのちの教育』は、ここで示した「総合演習」のテーマからも察することができる。保育者養成に携わる我々教員は、入試面接で、なぜこの学科を希望したのかと問えば、子どもが好きだからが圧倒的に多い。さらに問うと、今の子どもたちの置かれている環境問題にも触れる。そして、さらに、現在のニュースを問えば、多くの者が、若い親たちの自分の子どもに対する虐待行為に対して深く心を傷めているのである。一方、ゼミ学生の多くが、子どもたちへの虐待行為に真剣に目を向けて、虐待する若い親たちの気持ちがわからないと言い切る。幼い生命を預かる保育者を目指す若者たちは、「いのち」に敏感に反応している。「いのち教育」の重さは、村井や長尾、そして得丸からも強く伝わってくる。

近い将来、乳児や幼児と接する仕事に就くであろう保育者養成校での学生たちが、一人一人の個体としての子どもの生命の尊さ、生命力、生き続ける大切さなどを語り論じ合うことは、将来の保育者現場で、時には立ち向かわざるを得ないであろうことに、対応できようか。幼児の人的環境問題、虐待やあってはならない幼い命を絶つという現象に対する保育者としての心の糧として、「いのちの教育」での体験を、若い親たちに、以心伝心して行ってほしいと思うからでもある。資料2として新潟大学シラバスの一部を最後尾に揚げておく。

．結びにかえて

平成14（2002）年8月19日付朝刊の見出し、「大学・短大 特色ある教育100校選定 来年度から文部科学省 重点的に助成」が、目に飛び込んできた。「大学同士を競わせて大学教育の質の向上をはかるため、文部科学省は来年度から、全国の国公立の大学・短大から、特に教育に力を入れている大学を選び、重点的に助成する方針を決めた。『研究分野』で優秀な大学を選ぶ『トップ30』のいわば『教育版』。短大も対象にし、選ばれた大学名は親や受験生に公表する。来年度予算の概算要求に事業費を折り込む。…⁽¹¹⁾」

いやはや、とも思う。大学の教育は、助成金を掲げねば一向に改善されないのであろうか。小・中・高等学校の現場教師たちには、どう映っているのであろうか。そうではない。文部科学省も、大学の教育改革には力を入れてきた。大学生の学力低下が叫ばれて久しくなっている。日本の高等教育の体力の乏しさが目立ち始めている現状を踏まえ、すでに大学での教授開発として、FD（Faculty Development）機構を発している。“大学教員が授業の内容・方法を改善し、向上させるための取り組み”の総称としてFDが用いられている。しかし、教授法の改善は遅々とし、学生の自立と専門的力量的の体力向上につながっていないのが現状といえよう。

そのようななか、教員養成大学では、「総合演習」の登場により、大学での教育内容、教授

方法に新風が巻き興った。「総合演習」では、大学教員に、教員を目指す学生に対し、自立と専門的力量（「総合的な学習の時間」を指導しうる力量）を培う教育内容と教授方法が問われたのである。大学での反応は、ここで紹介した兵庫教育大学、山形大学教育学部、信州大学教育学部での取り組みから察しられよう。大学教員に、これまでの注入教育から、学生支援教育体制へと、それぞれの大学カリキュラム検討委員会や総合演習対策委員会が、「総合演習」の指針を打ち出し、実践しているのである。

「総合演習」の教育内容や教授方法では、学生に対するきめ細かな指導体制として、私立大学や私立短大において特色ある教育を打ち出し実践しているのが目立つ。しかし、それはまだ、前向きに取り組む特定な大学・短大といえよう。ここで示した日福大、宝仙学園短大、山梨学院短大、頌栄短大の姿がそれに当たる。そして、現学生の実態をしっかりと把握した上で、「総合演習」をこれからの大学教育の在り方を問い直す柱に据えた、久留米信愛女学院短大の行動は、各短大での「総合演習」の在り方の指針にもなる。

先の9月4日、南アフリカ、ヨハネスブルグでの「環境問題サミット（持続可能な開発に関する世界首脳会議）」では、環境保全と貧困解消・開発を目指す「世界実施文書」が採択された。しかし、各国のおもわくがからみ、妥協的な協定で終結している。地球温暖化への歯止めはかからなかったと言えるし、発展途上国での人命対策への援助も後退している。経済大国、消費大国のエゴが見えかくれするのも事実といえた。

世界での環境問題や一人一人の生命の尊さへの関心は、教育の場で、繰り返し意識づけていく必要が重要といえる。「総合演習」の教育内容の吟味は、その上では大切な事柄なのである。「総合演習」の在り方をこれからも問い続けねばならないし、「総合演習」の教授方法が、大学全体の教育改革のきっかけになればと強く願う。そして、若い学生たちに人間性のある力量を育み、将来を託したいと思うのである。

2002. 9. 15.

注（引用文献）

- (1) 成田滋：「総合演習」の位置づけとカリキュラムの考え方，教職課程における教育内容・方法の開発研究事業計画書（総合演習報告），P.3～7，兵庫教育大学カリキュラム開発研究会，2000．
- (2) 鈴木隆：第1章「総合演習」のねらいとその達成に向けての方策，教職課程における教育内容・方法の開発研究書（開発研究事項・総合演習），P.1～4，山形大学教育学部山形大学カリキュラム開発研究会，2000．
- (3) 重信卓夫他：教職課程における教育内容・方法の開発研究 学生の成長を支援する科目としての「総合演習」（1）及び（2），久留米信愛女学院短期大学研究紀要，第22，23号，2000，2001．
- (4) 生野金三：総合演習研究，西南学院大学児童教育学論集，第27巻，第1号，P.14～17，2000．
- (5) 藤田紀昭：日本福祉大学社会福祉学部導入教育，総合演習の実践例，大学と教育，第30号，P.4～15，東海高等教育研究所，2001．
- (6) 平成11年度私立短大保育科関係教職員研修会 第4分科会での発表配付資料から
- (7) 同上

- (8) 村井淳志：生と死のリアルな現場から隔離された子どもたち，現代教育科学，548号，P5～7，2002．
- (9) 長尾彰夫：「生命の教育」を「命^めどう宝^{たから}」としてとらえ直す，現代教育科学，548号，P.14～16，2002．
- (10) 得丸定子：「いのち教育」って何でしょう？，教職課程，第27巻，第14号，P.20～23，協同出版株式会社，2001．
- (11) 朝日新聞、平成14年8月19日朝刊1面（名古屋版）

資料1

平成11年度私立短大保育科関係教職員研修会の
アンケート集計結果資料を小川哲男が整理したもの

(1) 総合演習の授業の形態

① 演習形式

- ・ 内容に応じてゼミ，講義並びに少人数の演習形式
- ・ 付属幼稚園での指導法の研究を含む
- ・ 分野を学生に選択させ，テーマについてディスカッション形式
- ・ 最初のオリエンテーション時，各担当のテーマ及び内容，その課題について説明を受け，自ら演習グループを選択する。その後，各担当者の指導のもとに，演習授業を実施する。最終的にはそれぞれのグループの成果を報告し合う

② セミナール形式

- ・ 卒業研究，ゼミのような形態
- ・ ゼミ形式で行い，あるテーマについて分担して調べてきて，発表し，次回にまた，次の課題について調べてくる

③ 講義+演習形式

- ・ 講義+学生が課題に即して行う演習
- ・ 全体での講義と小グループに分かれての演習
- ・ 前期は主として全体を対象とした講義及び演習形式，後期はグループ毎

④ 体験学習を加味したもの

- ・ 現地見学，体験学習，話し合い学習
- ・ 福祉施設，養護学校の参観 ・ ボランティア活動への参観

⑤ オムニバス形式もしくは複数教員のリレー方式による授業

- ・ 人間尊重，地球環境，少子化，家族と社会の4課題について4名の教員がリレー方式

(2) 評価の内容・方法

- ① 学習態度 熱意，出席状況，資料収集，発表，協議，模擬保育への参加状況等
- ② 学習成果 レポート，発表，指導計画，模擬保育の内容・方法・技術・論述等

(3) 従来の科目との関係（例えばゼミ，卒業研究など）

① 新設として

- ア 卒業研究セミナーとは切り離した独自の学科として
- イ 従来の科目とは別個に扱う
- ウ 別科目であるが，卒業研究の基礎科目として位置づける

② 従来の科目の改組

- ア 現行の「人間関係論」を「総合演習」科目とする
- イ 「総合演習」科目を1年次開講の演習科目として，2年のゼミに先立つ共通

必修科目として

ウ 卒業研究を廃止し、総合演習にした

③ 名称変更

ア 「特別研究」(ゼミ)を「総合演習」とした

イ 従来の卒業研究の内容を、今回の「総合演習」新設の趣旨に沿うように検討を加える

(4) この科目で学生に育てたい資質能力

① 個人の内的能力に関する内容

ア 問題解決の能力

- ・ 自分の力で考え、解決する能力
- ・ 主体的に考え、創意工夫を生かす能力・態度
- ・ 自ら課題を設定し、研究する態度
- ・ 研究成果をまとめ、発表する能力
- ・ 企画力 ・ 思考力 ・ 探究、発見、応用力

イ 情報収集・整理・活用能力

ウ 教育現場に反映できる指導法

エ 人間としての資質、人間関係を築く力、対人関係

② 対社会的な処理能力

ア 自然体験、生活体験、人間関係の調整体験などを通して、豊かな人間性

イ 国際的な環境、福祉等のグローバルな問題を身近な問題として理解・関心

ウ 我が国の種々の社会問題に対する分析能力

(5) 総合演習のテーマの例

① 環境問題

・ 人間の生存と環境 ・ 自然破壊 ・ 環境汚染 ・ 環境ホルモン ・ 自然との共生
・ 保育と自然 ・ 地域社会と環境問題

② 国際交流・異文化理解

・ 文化比較 ・ 国際情勢 ・ 国際化と教育 ・ アジアの子どもを考える ・ 国際論
・ 世界の国々の保育

③ 少子化・高齢化社会

・ 少子化 ・ 高齢化と地域福祉 ・ 少子社会と子育て支援 ・ 少子化と教育
・ 少子化社会と子ども

④ 福祉

・ 人間の生活と福祉 ・ バリアフリーの実体験と調査レポート ・ ボランティア活動
・ 福祉と芸術 ・ 社会行政と福祉 ・ 障害者問題 ・ 共生、共存

⑤ 人権・権利

・ 児童の権利に関する条約 ・ 人権教育と子ども ・ いじめ、幼児虐待 ・ 子どもの平和
・ 人権尊重

⑥ 保育・教育

・ 21世紀の幼児教育 ・ 幼児期の知的発達と思いやり ・ 幼児期の環境と発達
・ 保育者としての人間性と専門性

⑦ 生命観・生命倫理

・ 命の尊厳 ・ 死と生 ・ 生命、科学、宗教、福祉 ・ 生命倫理

⑧ 情報化社会

・ 社会環境、メディア ・ 情報環境 ・ 価値の多様化 ・ パソコン

⑨ 家族のあり方

「総合演習」ノート

- ・ 幼児虐待と親子関係 ・ 子育て支援 ・ 家族構成 ・ 少子化と家庭
- ⑩ 自己表現, コミュニケーション
- ⑪ ジェンダー
- ⑫ 音楽, 舞踊, 人形劇
- ⑬ 遊 び
- ⑭ そ の 他
- ⑮ 総合演習の趣旨との関連性が不明なもの ——— 47件で一番多い
 - ・ 教育実習での留意事項 ・ 子どもの自立 ・ 発達理解と援助 ・ 教育学の古典
 - ・ 西洋音楽史 ・ 人形劇 ・ 農園 ・ 宮沢賢治 ・ カウンセラー ・ 小動物園

出典：小川哲男 これからの教師に求める資質能力と総合演習カリキュラム，『学苑』，718号，P.38～40，昭和女子大学近代文化研究所，2000.

資料2

新潟大学シラバスから

授 業 科 目	単 位	配当年次	担 当 教 員
総合演習	2	2年	鈴木真由子 他
テーマ 【現代社会における「いのち」を考える】			
<p>【科目の概要】</p> <p>現代社会は、子どもたちが自然に対する畏敬の念を家庭生活の中で実感しにくくなっていることに加え、「いのち」の有限性や大切さ、その意味や尊厳について自分自身に照らして受け止めることが、極めて困難な状況にある。</p> <p>そこで本演習では、次の2点を目標に学習をすすめる。</p> <p>① 現代社会における「いのち」をめぐる諸問題について、様々な角度・観点から相互に討議し、読み、歩き、出会い、参加し、考えることを目指す。</p> <p>② 現代社会において「生きること」の意味を追究する中で人間として「成長発達すること」及び「生きること」を問う。</p> <p>本演習では、研究分野が異なる複数の教員が共同指導体制をとる。「いのち」そのものがもつ総合性を様々な方法や多角的な見方で捉えるためには、特定の価値観に拘束されないことが重要である。</p> <p>なお、原則として、第2・4木曜日の4時限（4～11月）を総合演習の活動時間とし、夏期休業中の集中的な学習が必要になる。</p> <p>【授業計画】</p> <p>《第1期：問題意識の醸成》……4月～6月</p> <ol style="list-style-type: none"> 「いのち」に関する興味・関心について教員・学生で意見交流 「いのち」をめぐる現代の問題構造・諸相の把握 興味・関心のあるテーマに関わる学習会（1） <ul style="list-style-type: none"> ○ビデオの視聴 ○社会見学／インタビュー ○教員による講義／パネルディスカッション ○ゲストによる講演 企画書の作成 <p>《第2期：追究テーマの明確化》……7月</p> <ol style="list-style-type: none"> 追究テーマと追求の方法を検討 興味・関心のあるテーマに関わる学習会（2） <ul style="list-style-type: none"> ○ビデオの視聴 ○社会見学／インタビュー ○教員による講義／パネルディスカッション ○ゲストによる講演 中間報告／計画の修正 <p>《第3期：テーマの追究》……7月～9月</p> <ol style="list-style-type: none"> 各自で設定したテーマを追求 <p>《第4期：追究のまとめ》……10月～11月</p> <ol style="list-style-type: none"> 追究した内容の整理 最終報告会 現代社会における『いのち』について考えるディスカッション 総合演習活動レポートの作成 			

出典：齋藤 勉 大学における総合学習「総合演習」の取組の課題、『せいかつ&そごう』、第9号、P.95、日本生活科・総合学習教育学会、2002.